

染織よりみた近世帷子の考察

佐藤 泰子*

Textile Designs of KATABIRA in Modern Ages

Yasuko Sato

緒言

- I 近世帷子の形成
 - II 幕初から明暦頃までの帷子
 - III 寛文から明和頃までの帷子
 - IV 安永から幕末頃までの帷子
- 結語

緒言

江戸時代中期の国学者、塙保己一（1746—1821）の著書『武家名目抄』には、帷子を解して按、かたひらといふはもと衣服のみならず凡ものを包み上に襦ひ下に敷く物をも又懸垂れてまきる物をも皆通して帷といふ裏なくしてひとひらなるものゝ通称なり然るを小袖のひとひらなるを担任せて帷子といふは猶袖の小袖練貫の小袖を袷といひ練貫といふか如し例の省語なり昔は絹にもあれ布にもあれひとへの小袖を帷子といひて五月五日より絹帷子六月七月は布帷子を着用しけり近世は絹帷子を単物又は単なといひ布のひとへに限りて帷子といふからに端午の朝きのふの袷に頓て布帷子をぬきかふることゝなりたり

* 本学助教授 日本服装史

と記し¹⁾、また、文化七年(1810)刊『玉かつま』にも「ゆかたびら かたびら」の項に

かたびらとは、今の世には、布の衣のみ云へど、もとさには有らず。裏なく一重なるものを、何にまれ、かたびらとは云ふなりとあり²⁾、さらに、天保から嘉永年間(1830—50)に成る『近世風俗志』に

守貞日今俗は麻布単衣をのみかたびらと雖ども本来は麻布綿布より羅綾に至り何にても無裏の単衣を惣てかたびらとは云也とある³⁾。すなわち、帷子の字源は古く、小袖としての帷子は、江戸中期頃までの意味内容は広範に渡り、江戸後期には特定化されていくことを知る。本稿は、この推移の詳細および背景を洞察することによって、近世模様小袖の動向の一面を即時的に明確化することを試みるものである。

I 近世帷子の形成

古く、『日本書紀』卷廿五 孝徳天皇の大化二年(646)丙午三月の記述に、役人には「其葬時帷帳等用=白布=」、庶民には「其帷帳等可レ用=鹿布=」と見られる⁴⁾「帷」の語は、平安時代になると、染織技術の発達に伴い『延喜式』

卷十五 内蔵寮の染物の条に「^{カレンル}綾帷二條」と記され⁵⁾、また建築様式上の特色から『和名類聚鈔』卷第十四 屏障具第百八十七に「帷 釋名云帷^{音帷和名加太比良}圍也以自障圍也」と見出される⁶⁾。この屏障具としての帷は、その頃から盛んになる文学書の随所に散見されるのであるが⁷⁾、同時に裏を付けない衣服も「帷 帷子 かたびら」と称されるようになり、『枕草子』の三十三に「蔵人の五位……夏などのいとあつきにも、かたびらいとあざやかにて、^{うすふたあい あおにび さしぬき}薄二藍、青鈍の指貫など、ふみちらしてゐたまり⁸⁾」、『平家物語』卷第十 千手前に「よはひ 廿ばかりなる女房……まことにゆうにうつくしきが、めゆいのかたびらにそめつけのゆまきして⁹⁾」、『つれづれ草』第五十三段に「三足なる角の上に、かたびらをうちかけて¹⁰⁾」等と表現されている。

さらに、中世武家社会において、上級社会の服装が装束からしだいに小袖に転換されると、夏の衣料に帷子が定着することは、伊勢貞陸の『簾中舊記』にみる東山殿の御臺所妙善院の時（1483—90）の女房衆衣裳の記述¹¹⁾、また大永八年（1528）に成る伊勢貞頼宗五の『宗五大艸紙』における「衣装の事」の記述¹²⁾等にも明らかである。

この時代の帷子の地質をみると

唐布（『蜷川親元記』『貞順豹文書』『御供古實』『鳥板記』『諸大名出仕記』）

北絹（『諸大名出仕記』）

紋紗（『諸大名出仕記』）

生絹（『蜷川親元記』『諸大名出仕記』『太閤記』卷十五『豊太閤入御亜相第記』『前田亭御成記』『信長公記』卷十四）

一重すすし（*『貞順豹文書』『河村誓真聞書』）

厚絹（『諸大名出仕記』）

越後布（『諸大名出仕記』）

などがあり、*印は、文献記事中には帷子と明記されていないが、『諸大名出仕記』によると、裕である丸生絹に対する語の帷子と思われるのである¹³⁾。

次にその染織をみると

辻かはな（『蜷川親元記』）

つじがはな（『宗五大艸紙』）

つしか花（『河村誓真聞書』）

辻か花染帷（『太閤記』卷十五）

辻か花染め（『信長公記』卷十四）

紅の入りたる帷子（『御供古實』）

あかき帷子（『女房進退』）

梅ぞめ（『蜷川親元記』『宗五大艸紙』）

梅浅黄（『御供古實』）

梅萌黄（『諸大名出仕記』）

めゆひ（『諸大名出仕記』）

はく（『宗五大艸紙』『貞順豹文書』）

摺薄（『太閤記』卷十五）

すりはく（『駒井日記』下）

かうはい（『駒井日記』下）

などがあり、小袖全盛時代を形成する江戸時代に先駆けて、盛夏の料としての帷子は、白き帷子が正式である¹⁴⁾といいながらも、裕小袖同様¹⁵⁾多様性を示している。さらに留意される点は、絹帷子が主である点と、辻が花染とは、今日大紋りに描絵を加えた技法をいうのは全くの誤用で、女房衆や十二、三歳までの男女児の着用する帷子染織の一種であると判明される点である¹⁶⁾。

II 幕初から明暦頃までの帷子

今日、上杉謙信、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康等の衣裳の遺品は、それぞれに差異こそあれ、近世初期の豪華絢爛たる文化の担い手が武将や大名であったことを顕著に物語るものである。したがって、ここに、家康の薨後、駿府から尾張徳川家に相続された遺産目録『駿府御分物御道具帳』十二帳のうち、元和三年（1617）辰二月三日付記の第六帳「色々絹布帳」から帷子を抜粋すると

一、御紋之御帷子	二百七
一、白キ御帷子	五百六拾四
一、染御帷子	百三拾一
一、高宮之帷子	二拾一
一、女帷子	三拾

一、近江さらしの帷子	百余七
一、ちゝミの帷子	三
一、地ぬの帷子	七十五
帷子合千百四拾八	
とあり、このほかに	
一、白はふたへ御単物	拾
一、さやの御単物	一
一、染物の御単物	一
一、はくの単物	二
一、おり筋単物	二
一、あやの単物	一
また関連の反物に	
一、越後布	三百四拾三疋半
一、越後上布	三拾九疋
一、奈良さらし	六百五余四疋
一、同さらし	五拾疋
一、高宮 内 ^{十四端崎} _{七十二端} 四ひろ物	五百八端
一、同嶋	百六十四端
一、はつこう	四百六拾九端
一、近江さらし	三拾八端
一、地布 内 ^{拾二疋} 木ぬの	七拾一疋
一、からむしぬの	七拾七端
一、伊奈ぬの	拾四端
.....	

などとある。帷子と単物が区別されている点は、緒言に記す後世のような類別が既になされたのであろうか。また、Iに記すように女性および小児の小袖である辻が花染の語が見られないのは、彼らの小袖が多く含まれなかったからであらうか。しかし管見では、慶長八年（1603）刊の『日葡辞書』に「つじがはな 木の葉で色をつけたかたびら くないその他の色のししう そのようなししう或はそめもの」とあるが、その後の記録を見い出さないの、辻が花染の語は慶長末から元和初期（1604—15）にしだいに消滅したと解されるのである。また、「染御帷子」や「女帷子」だけでは判然としないが、現存する遺品から小紋染の帷子の存在は確かであり、さらに前代のような紅の帷子や目結の帷子も含まれていたと思われる。それは、その後慶

安三年（1650）刊『女鏡秘傳書』上巻十八に「かたびらの事」として

したよりしろきをかんとす うへよりもしろきかたびらくらゐありてよし……くれないのそめ物なとよし したよりもなをよし べにかのこのたぐひわかきうちよし……

と記されている¹⁷⁾ことから判断されよう。

III 寛文から明和頃までの帷子

明暦の大火（1657）を境に、財力を得た町人の間に美服への追求が活発となり、幕府の奢侈禁止令も表向きのことで、豪商の経済力を基盤として形成された泰平文化は留ることなく、元禄から正徳期（1688—1716）には最高潮に達した。その横溢振りは、西鶴文学や初期洒落本にも盛んに描かれた。しかし、八代將軍吉宗は、倭約令・貨幣改鑄・物価取締令・賭博の禁止・情死の禁止・豊後節の禁止などと、財政緊縮および世相秩序の是正に努めた結果（享保の改革）、宝暦・明和（1751—1772）の頃には一応の落ち着きを取り戻した。

この時期の帷子を考察するためには、茶屋染を研究の対象に含まなければならない。なぜならば、後述IVの御殿女中の夏の服制に定められた茶屋辻は、寛永十五年（1638）刊の俳諧作法書『毛吹草』卷三付号の「フ」の項に「辻——染^{ちやうかたびら} 稀」とある¹⁸⁾ことから、茶屋染の帷子と解され、また現存する多くの茶屋染は、奈良晒・能登上布・越後布のような上質苧麻製の帷子に限られていることから、茶屋染は帷子特有の染色色であると見做されるのである。

まず、貞享四年（1687）、京都の奥田松柏軒が著わし、江戸より出版された女性の教養のための書『女用訓蒙図彙』の卷二を見ると、「衣裳四季のかほり」と題して

卯月朔日より裕なりけふを更衣といふ也本式はけふは白小袖也白重といふ是なり略儀はさまざま好^{このむとこう}所の模様を着すべし五月五日より男は帷子也女郎は本式はすゝしうらねりぬきなり腰まきもすゝしうらなり六月朔日よりか

たびらなり八月朔日より又ねりぬきなりこし
 巻はそめつけの小袖本式なり
 と記されている¹⁹⁾。これは、公武の有職故実
 に定められた更衣の規定が、当代上級の町人社会
 にまで広く浸透した状況を意味するものであろ
 う。

そこで、帷子の地質を西鶴文学書に求めると
 越後ちぶみの帷子(『好色二代男』巻二 貞
 享元年刊²⁰⁾)

高宮の裕帷子(『同書』巻七²¹⁾)

嶋曝のかたびら(『好色一代女』巻六 貞

享二年刊²²⁾)

絹帷子(『本朝桜陰比事』巻三 元禄二年
 刊²³⁾)

小倉ちぶみの帷子(『西鶴俗つれづれ』巻二
 元禄八年刊²⁴⁾)

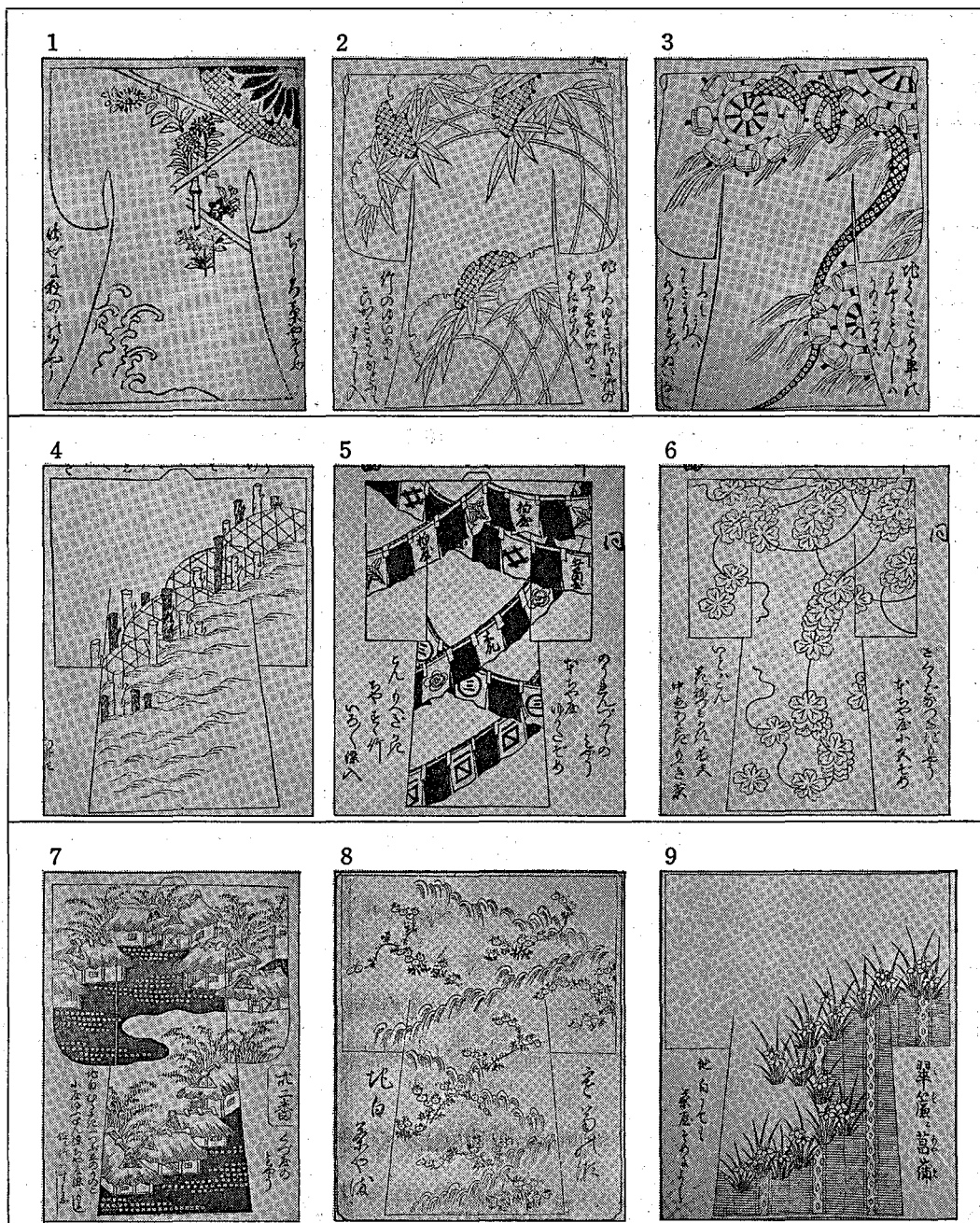
明石ちぶみの帷子(『萬の文反古』巻五 元
 禄九年刊²⁵⁾)

奈良さらしの浅黄のかたびら(『同書』同²⁶⁾)

などとさまざまであるが、元禄三年(1690)刊
 の『人倫訓蒙図彙』には、「帷子屋 万の模様を
 染させてこれをあきなふ 嶋へ近江の高宮より

表Ⅰ 小袖雛形本にみる帷子・茶屋染

No.	書 名	発刊年	件数	記 載 内 容	図 例
①	御 ひ い な か た	寛文 7	1	ちしろ茶やそめ	図Ⅰ-1
②	諸国御ひいなかた	貞享 3	32	茶屋染もやうの事 ○地色——白 7、花色・うこん色各 6、萌黄 4、浅黄 ・赤各 2、木賊・桃色・たまご色・唐茶 ・憲法各 1 ○加工——かのこ 18・かのこ入 7・おちかのこ 2・ おちかのこ入 1・べにかのこ入 1・大か のこ入 1、ぬい 2	図Ⅰ-2 図Ⅰ-3
③	源氏ひなかつ	貞享 4	1	初むかしならで今もすたらぬへ茶屋染	
④	友禅ひいながた	貞享 5	12	かたびら ○地色——ねずみ 4、たまご色 3、白・浅黄・薄浅 黄・かわらけ・唐茶各 1 ○加工——さいしき絵てい入 4・さいしきてい入 2、 さいしきてい絵 2・さいしき銀でい 1、 さいしき 2・さいしき絵 1	図Ⅰ-4
⑤	袖 ひ い な が た	元禄元	1	地白ちや屋そめわけ	
⑥	正 徳 ひ な 形	正徳 3	10	ふ路屋風 ちや屋ぞめ 1、本ちや屋ぞめ 4・本ちや屋ゆかた ぞめ 1・本ちや屋つぶ入ぞめ 1・本ちや屋小色ぞ め 1、小色ぞめ、その他(多色染)	図Ⅰ-5 図Ⅰ-6
⑦	古今模様雛形大全	正徳 6	2	ちや屋染にもよし 本ちや屋染いろいろ	図Ⅰ-7
⑧	雛 形 千 歳 草	宝暦 4	1	地白茶や染	図Ⅰ-8
⑨	雛 形 吉 野 山	明和 2	2	ちや屋ぞめにしてよし 地白にても茶屋ぞめによし	図Ⅰ-9



表I 小袖雛形本No.

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨

図I 小袖雛形本にみる帷子・茶屋染

出す」と記され²⁷⁾、この高宮は、新見正朝の見聞集、享保七年(1722)刊『むかしむかし物語』に「帷子も、縮高宮とて賣ありく、此高宮島に能模様は帷子に賣、又袴に能は夏袴に仕立、御旗本も着す、價は一反五六匁なりし、近年は帷子は奈良半晒し熨斗縮、何も高直、袴も郡内平せいがら平などにて、高直なるはかまを着す、戻子はみな絹戻子成」と、時代の推移を示している²⁸⁾。さらに、享保十七年(1732)刊『世寶大成萬金産業袋』巻四 夏物類には、絹縮・越後縮・宮縮・島すずし・無地すずし・紋すずし・八丈すずし・りう久もし・高宮等が列記されている²⁹⁾。ここに、江戸中期における機業の発達の上に、贅を凝らした小袖の表面上の豪華さが、禁令、闕所、追放等幕府から繰り返し発せられた取締りによって、しだいに様相を変え、やがて洗練に向かうとき、上質の地質に輕妙な美を求める傾向を知るのである。

つぎに、先に示した理由により、当代の小袖雛形本に散見される帷子と茶屋染を抜粋すると表Ⅰおよび図Ⅰに示すとおりである。ただし、ここに記した正徳六年(1716)刊『古今模様雛形大全』は、元禄十一年(1698)刊『新板和国ひいなかた大全』を天地二冊に改編した複製本

の一方であるといわれる³⁰⁾。現時点では全頁の確認の機を得ないので、細部の照合が不可能であるが、小袖型がやゝ異なるようである。したがってこの資料に関しては時代的な幅を持って考察することとする。

そこで、茶屋染については、その初期の状況に関して、文化三年(1806)刊『女中常服略記』に「寛永の頃茶屋宗理と云ものゝ家にて染出したる模様なり茶やは呉服所の名にて四郎次郎長意共に三家なり」と記されているが³¹⁾、これ以上の詳細は得られない。しかし、その後、管見では、寛永七年(1667)刊『御ひいなかた』以下表Ⅰに示す雛形本での見出、および貞享三年(1687)刊『雍州府志』巻七 土産門下(服器部)の「紅梅」の項に、「紫染梅染茶染紺屋染茶屋染吉長染等各有ニ染レ之家-」とある³²⁾こと等により、前代の縫箔に代って、急速に発達した各種模様染の一種としての流行を知ることができよう。さらに、ここにみる茶屋染の内容は、表Ⅰに記した『諸国御ひいなかた』所収の添書の一例をあげると、「地あか ひあふき(檜扇)のもやうあふきにおちかのこ入 もつこう(木瓜)ハこん(紺)入 うへにはぬい なわ(縄)ハおちかのこ」と鹿の子・縫・彩色入で、これ



紅麻地竹梅模様絞染繡帷子



白麻地垣藤花舟模様染繡帷子
(部分)



黒麻地波蛇籠桜花文字模様染繡帷子(部分)

図Ⅱ 現存帷子資料 (東京国立博物館蔵)

と同類、かつ元禄期(1688—1704)の豪健さを有する帷子が現存する(図Ⅱ参照)。これらは、後年、前掲の『世寶大成萬金産業袋』巻四の「染帷子」の項に

屋しき風といふは、地黒・地赤・地しろ、地うこん、地浅黄等にして、龍田のもみぢ、篋に櫻、菊流しの類に大きな文字、古文字、格字あるひは行、かなもじなど入れ、縫入ぬいなし打出し鹿子にて仕あげ、その内にもまた少くゆふぜんをあしらひなどする類、如レ此のみにも限るべからざれども、まづ大略は右の如し、町風といふはゆふぜんもやうあつさりとして、生燕脂しやうえんじを色よく遣ひ幽かすかに至りたる風、あるひは桔梗すすきの無地に白の結かのこじたて、濃はな色に白上り薄に蝶、またはすみ繪素縫したて、ずいふんと手をつくし染る事なれば、委くは書のせがたし

と記された内容³³⁾に相当するのではないだろうか。すなわち、元禄前後の茶屋染帷子は、享保十七年(1732)頃には染帷子と称されたことになるのではないだろうか。同書には別に「茶屋染」の項も置かれ

中古はもつばら此染を好みし、右のだて染より出たるもやうにて、多くは柿、あいらう、もへぎ等にて細書仕たてのもやう

と記されて³⁴⁾、「右のだて染」すなわち「平伊達染」の項には

地白・地浅黄・薄柄にして友善いうぜんと茶屋染との間のもやうなり、これ古代より公家武家に用ひらるゝ所、かき、あゐらうの細がき入り、翠簾みずにかうぼね、しのぶにあみ笠、梅にもじ入等の類のもやう、いかにも尋常に香車なるを誼とす

とあるが³⁵⁾、茶屋染の実体に関しては文意に明確さを欠く。しかし、『正徳ひな形』や『古今模様雛形大全』に表わされた本茶屋染については、同じく「茶屋染」の項に

本ちや屋などいふは、誠瀬戸物の南京の本渡りを見ることく、手をつくしたるそめやう、今にも至てしほらしきもやうがらなり、しかし此ごろは廃れり

と記している³⁶⁾。

そして、その後の帷子の傾向については、越智久為の『反古染』に

元文(1736—41)の頃、紅縞、浅黄縞、明ぼの染、寶暦(1751—64)の頃、もへぎ縞、大名じま、とき色、桔梗色、堅縞、横縞、基ばん縞、とき色小紋、五寸模様、明和(1764—72)の頃より緞の紺桔梗、路孝茶、ひわ茶に紅晒の重ね著、天明(1781—89)の頃専ら也とあり³⁷⁾、浅黄、縞、小紋、五寸模様、緞、路孝茶と、当時の小袖染織における流行をそのまま表明するものである³⁸⁾。このような状況下に、表に示したような宝暦・明和期(1751—72)の茶屋染の存在は、もはや極めて少数例であり、前代の余波であると解されるであろう。また明和三—五年(1766—68)に成る木室卯雲きむろぼううんの『見た京物語』に「春より夏は女多く紅晒の下帷子を着る」とある³⁹⁾のは、前掲書『反古染』の「ひわ茶に紅晒の重ね著」の着装を指すのであろうか。紅の下着にうすものの渋味の色を重ねる夏の風情ある着装は、清長の『当世遊里美人合』等、美人画にも往々収められた当世好みの美の領域となったのである。

IV 安永から幕末頃までの帷子

女性の髪型と帯とが急速に発達した宝暦(1751—64)頃より、小袖染織は、しだいに様相を変え、以後渋味の勝った地色に、裾模様、裏模様、小紋、紺等が定着する。横盛であった町人の服飾文化に鮮味が薄れると、その影に姿を潜めていた武家小袖が、この時期を特色づけるものとなった。

安政五年(1858)刊『奥女中袖鏡』には、「年中式服の次第并着用刻限の事」として

一四月朔日より、五月四日まで、裕、地白、

地黒の内

一五月五日より、八月晦日まで、帷子、地白、

地黒のうち

一端午の佳節、地黒の事

一七夕の佳節、地白の事

一九月朔日より、八日まで、裕、地白、地黒の内

とあり⁴⁰⁾、これよりも先、文化三年(1806)刊『女中常服略記』では、同様に月毎の着装を記しているが、地色に関してはさらに詳しく

六月 地黒地赤地白の帷子下着白かたひらを重ねべし帯腰巻前におなし近世地白のミ用ゆ
たまたま地黒も用地赤はたへて用ひす時には必地黒を用ひしなり

と説明し、また七夕の地白帷子についても

七夕には萩すゝき梶の葉等の箔模様を着すべし………八朔に七夕のこく箔模様を用ゆる事家風によるべし

と書き添えている⁴¹⁾。

さらに、当代の帷子を解して『常服便覧』の「帷子」の項に

地は布色定らす縹梅染なとよし躰事嘶餘に云端午に菖蒲帷とて布を紺地白にそめて五月中着る也六月朔日より七月六日迄越後帷七夕より八月晦日迄さらしの白帷子を着すとされば五月中にはないろを用其後は白帷子を用へぎ事なるに今は七夕八朔の祝儀のミに白を用祝済は染帷子を式とす家により白帷子の格式様々有ちゝミは今は五月中より着す尤略儀の品

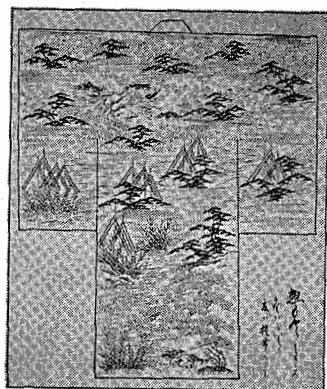
なれば晴の時用べからず若き者不可着と云すきやちゝミ絹縮等はなはだ略義也白に紋所染出したるは用へからず其余染出し染ぬき子細なし小袖といふは綿入にかきらす是も小袖なり片ひらは草の通称なれ共今是のミ称す

と記されている⁴²⁾。

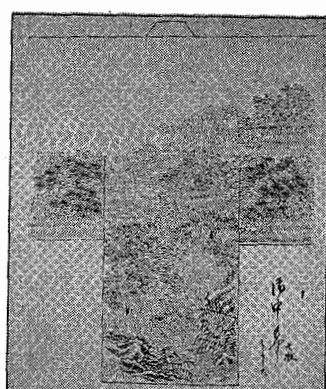
また前掲の『奥女中袖鏡』には、さらに「年中服柄の書」として

一御中臈以上、本式の身拵ひ、左にしるす
一地白本辻 表さらし麻 金銀のいと色糸にて惣縫模様 下重さらし 表袖口に紅羽二重 下重ね領心袖ぐちとも白羽ふたえ
一地黒本辻 表さらし麻 金銀の糸色糸にて惣ぬい模様 下重ねさらし 表袖口紅羽二重 下重ね領心袖ぐちとも白羽ふたえ
右辻二しな
………

一御小姓御側次本式身拵ひ左にしるす
一地白茶屋辻 表さらし麻 金銀の糸色糸にて惣ぬいもやう 下重ねさらし 表袖口紅羽二重 下重ね領心袖ぐちとも白羽ふたへ
一地黒茶屋辻 表さらし麻 金銀の糸色糸にて惣ぬいもやう 下かさねさらし 表袖口紅羽ふたえ 下重ねゑり心袖ぐちとも白羽



総模様



中模様



古典文学に因む模様(部分)

図Ⅲ 江戸後期御殿女中帷子模様 (紀州徳川家衣裳図録)

二重

右辻二しな

と記され、記載内容は以下の女中身拵え、および常服に至るまで及んでいる⁴³⁾。

上記の引用文から、茶屋辻の上に本辻があることを知る。両者の相違について、喜多川守貞は『近世風俗志』に「茶屋辻は辻の赤みあり」としている⁴⁴⁾が、判然としない。また三田村鳶魚は『御殿女中』に「茶屋四郎次郎から納めるのを茶屋辻、呉服後藤から納めるのを本辻といい、大紋綸子のように、丸形や亀甲の模様の中に、いろいろな花を縫ったのは、茶屋辻の変ったところなのです。本辻はサッパリした模様で少しあろうございました。藍の色目は茶屋辻の方が濃くて、何となく下品に見えます」と述べている⁴⁵⁾が、現存する帷子のうち、取合模様または附間模様の帷子、すなわち「大紋綸子のように云々」は、すべて縫入茶染で藍染のものは未見である。この点に関し、斉藤隆三著『江戸時代前半期の世相と衣裳風俗』には「後世にあっては茶色の一色から模様を構成せるを本辻といふに對して、藍の一色から成って居るのを茶屋辻といって居る」とあり「本辻は大奥以外には流布されぬが、茶屋辻は大奥以外にも三家や大大名の奥向」であったため、茶屋染の方が広く諸侯奥向にまで行渡ったのであろうと記している⁴⁶⁾。

模様に関しては、『南紀徳川史』第十六冊服制篇に総模様数十百種、中模様数十百種とあり、六十図を越える掲載絵図は、立涌や菱形に花束や花折枝を配する取合模様または附間模様と風景模様とに大別される⁴⁷⁾。風景模様では、王朝文学や謡曲の一場面を暗示させる風景・器物を配したものも多く、後にこれを御所解模様と呼んで、独特の小袖模様の一分野を確立させた。十帖二帙から成る肉筆衣裳雛形本『紀州徳川家旧蔵衣裳図録』は、水辺・屋形・菊まがきなど、さまざまな当代御殿女中帷子模様の優品を示している（図IV参照）。

次に、緒言に記した江戸後期における帷子の語意に関して、寛政三年（1791）刊『大磯風俗

仕懸文庫』第二回到「お虎 十七ばかり。紫紺のひとへもの。ふた葉あふひのあづまもやうの振袖……」とありながらも⁴⁸⁾、文政九年（1826）刊『色深狭睡夢』上之巻第一回到「むらさきの細のかたびら。すそもやうは唐あいおもて画きたる山水……」ということもあって⁴⁹⁾、帷子と単衣の概念は必ずしも一定していないことを知るのである。

結 語

近世、およそ三百年における小袖の変貌は実に多大なものであった。それは、時の衣生活を左右する社会的実権が、武将・大名から豪商を経て、やがて一般町人社会にまで浸透したことによるものであり、為政者の側からみれば、天下統一後封建体制が極点に達したとき、人的にも地域的にも広域を対象とした徹底的統制に、火災、風水害、旱魃などの災害も加わって、予期せずも自らが招いた変貌であったといえよう。

このような状況にあって、帷子も時々の世相を反映しながら全く同様の意味を持って推移した。しかし、小袖全般を総合して問題視する場合には、漠然として捉えにくかったり、見落してしまいがちな点が、研究対象の焦点を細部に絞って明確化したとき、史料の上に成る真意とそれらの相互関係に問題解明の重要性が存在するのであろう。たとえば、小袖雛形本にみる帷子、茶屋染（図I）およびそれらと同類と思われる現在帷子資料（図II）と江戸後期御殿女中の茶屋辻（図III）の間を結ぶ諸問題や、また辻か花染帷子、茶屋染と本茶屋染およびそれらとの関連の予想される伊達染やゆかた染、茶屋辻と本辻等に関する諸問題が指摘される。本稿は、この見解においては問題提起の段階に過ぎないので、後日稿を改め、今後も個々の考察の蓄積の基に、近世模様小袖の解明を課題とする次第である。

注 釈

- 1) 故実叢書刊行会編 新訂増補故実叢書 第二十八回 明治図書出版・吉川弘文館 1954 P.426
 - 2) 與謝野寛他編纂 日本古典全集 第一回所収巻下 日本古典全集刊行会 1926 P.156
 - 3) 喜多川守貞著 第十五編女服 魚住書店 1970 P.542
 - 4) 黒板勝美国史大系編修会 新訂増補国史大系 第一巻下 吉川弘文館 1966 P.234
 - 5) 正宗敦夫編纂 日本古典全集 第二回所収第三 日本古典全集刊行会 1928 P.174
 - 6) 同書 第三回所収ハ一十四巻 1931 15表
 - 7) ¹「几帳の帷子いとあざやかに」『枕草子』七十六内裏の局 (久松潜一他監修 日本古典文学大系 19所収 岩波書店 1965 P.111)
²「御き丁の帷掛けかへ」『栄花物語』巻第八 はつはな (同書 75所収 1964 P.261)
³「御几帳の帷子ひきおろし」『源氏物語』若柴 (同書 14所収 1965 P.227)
⁴「御几帳の帷子など、よしあるさまに、し出づ」同書明石 (同書 15所収 1965 P.69)
⁵「よるの御帳の帷子を、四面ながらあげて」同書鈴虫 (同書 17所収 1965 P.77)
⁶「御帷の帷をいとよく畳みて」『宇治拾遺物語』巻第十一 七清水寺御帷給はる女の事(前掲5) 同書 第二回所収 1927 P.214)
 - 8) 7)-1 同書 同 P.74
 - 9) 7)-1 同書 33所収 1965 P.262, 263
 - 10) 佐々木信綱他監修 日本古典会書所収 朝日新聞社 1947 P.126
 - 11) 「女ばうい志やうの事。一、正月のきりには。二小袖一ありにめし候。一、五月一日。あさ小袖何にしても……。ひるはゑぬひ物の生うら。……五月うちは帷はめし候はず候。御臺さまめし候へば。私にてもめし候。一、六月一日。あしたはいづれも。赤きにても。黒きにても。御帷何にても。御すゝしの御こしまき。」(塙保己一編 群書類従 第拾五輯 武家部所収 経済雑誌社 1894 P.684, 685)
 - 12) 「衣装のかはり候時節の事。三月中はあはせにうす小袖。四月朔日よりあはせを着候。……五月五日迄は拾五日より男衆は帷。女中は殿中には生裏のねりぬきをめし候。御腰巻も生裏。六
- 月朔日より。七月中帷をめし候。八月朔日より。又ねりぬきをめし候。……男衆も古は八月一日より袷を着したるとて候。今は九月朔日よりあはせ。九月より小袖着候」(同書 同 P.626, 627)
- 13) 「丸生絹の事……丸すゝしとは。すゝしの袷の事也。一重すゝしとは。生絹の帷の事なり」(塙保己一編 統群書類従 第貳拾四輯下武家部所収 統群書類従完成会 1932 P.308)
 - 14) ¹「男の夏のはれは白帷也」『奉公覚悟之書』(前掲11) 同書 同所収 P.503)
²「帷の事……男は若も老たるも。白き帷似合候」『宗五大艸紙』(同書 同所収 P.629)
 - 15) 天正十七年(1589)刊『貞順豹文書』に「無紋の小袖、赤根之小袖、くれなひすちの小袖、一ツませの小袖、柴の小袖、梅そめの小袖、ちやそめの小袖、しゝらの小袖、ぬひ物の小袖、はくの小袖、白き小袖、かた身かはりのあはせ、すりの小袖、くろむめのあはせ、肩裾、めゆひの小袖」前掲13) 同書 同所収 P.31—34)とあり、また『駒井日記』文録三年(1594)三月三日秀吉の郡山舞台における観能に際して「白あや小袖、ぬいはく同、かうはい同、ぬめのたん小袖、からをり小袖、縫はく小袖、織すち小袖、ぬいはく小袖、紅梅小袖」(近藤瓶城編 改定史籍集覧 第二十五冊新加別記第六十一所収 近藤活版所 1902 P.539, 540)などに見られる。
 - 16) ¹「帷の事。つじがはな。はくなどは。女房児若衆などは能候」『宗五大艸紙』(前掲11) 同書 同所収 P.629)
²「つしか花又はゝの事。女房衆兒などの被着候。十二十三までハ男も着す」『河村誓真聞書』(前掲13) 同書 同所収 P.163)
 - 17) 田中ちた子・田中初夫共編 家政学文献集成 江戸期Ⅰ所収 渡辺書店 1966 P.289—291
 - 18) 松江維舟重頼著 岩波文庫 3304—3308 岩波書店 1972 P.126
 - 19) 前掲17)同書 統編江戸期Ⅷ所収 1970 P.59
 - 20) 日本名著全集刊行会編輯発行 日本名著全集 第一期出版江戸文芸之部第一巻 西鶴名作集上所収 1929 P.181
 - 21) 同書 同所収 P.276
 - 22) 同書 同所収 P.667

- 23) 同書 同第二卷 西鶴名作集下所収 1929 P.328
- 24) 同書 同所収 P.861
- 25) 同書 同所収 P.963
- 26) 同書 同所収 P.963
- 27) 前掲17)同書 続編江戸期XI所収 1969 P.158
- 28) 国書刊行会編 国書刊行会叢書 第三期 近世風俗見聞集 第一冊所収 国書刊行会 1970 P.33
- 29) 日本経済叢書刊行会編 通俗経済文庫 卷十二所収 1917 P.150—153
- 30) 上野佐江子編 小袖模様離形集成(2)解題 学習研究社 1974 P.21
- 31) 写本
- 32) 国書刊行会編 続々群書類従 第八地理部所収 続群書類従完成会 1978 P.207, 208
- 33) 前掲29) 同書 同所収 P.154
- 34) 同書 同所収 P.155
- 35) 同書 同所収 P.155
- 36) 同書 同所収 P.155
- 37) 国書刊行会編 国書刊行叢書 第一期 続燕石十種 第一冊所収 国書刊行会 P.178
- 38) 拙稿『江戸時代中期の染織』（服装文化協会編 服装文化 No.162 文化出版局 1979 P.63—67）参照
- 39) 日本随筆大成編集部編 日本随筆大成 第三期 第八卷所収 吉川弘文館 1974 P.20
- 40) 文化女子大学図書館蔵 写本 38丁表裏
- 41) 写本
- 42) 写本
- 43) 前掲40) 同書 48丁表、51丁表
- 44) 前掲3) 同書同 P.530
- 45) 三田村鳶魚全集 第三集所収 中央公論社 1976 P.150, 151
- 46) 大塚巧芸社 1933 P.166
- 47) 堀内信編 名著出版 1971 P.269—308
- 48) 前掲20) 同書 第十二卷 洒落本集所収 1929 P.553
- 49) 同書 同所収 P.764